武蔵野日曜聖書講筵

聖霊の人ピリポの伝道

――使徒行伝８章――

１９９１年６月２日
小池辰雄

無の境地　聖霊の力の徴　あけっぱなし　シモニズム　ピリポと闇人　前使徒たち

【使徒行伝８】

1サウロは彼の殺さるるを可しとせり。
その日エルサレムに在る教会に対いて大いなる迫害おこり、使徒たちの他は皆ユダヤ及びサマリヤの地方に散らさる。2敬虔なる人々ステパノを葬り、彼のために大いに胸打てり。3サウロは教会をあらし、家々に入り男女を引出して獄に付せり。

4ここに散らされたる者ども歴巡りて御言を宣べしが、5ピリポはサマリヤの町に下りてキリストの事を伝う。6群衆ピリポの行う徴を見聞して、心を一つにし、謹みて其の語る事どもを聴けり。7これ多くの人より、之に憑きたる穢れし霊、大声に叫びて出で、また中風の者と跛者と多く医されたるに因る。8この故にその町に大いなる歓喜おこれり。

9ここにシモンという人あり、前にその町にて魔術を行い、サマリヤ人を驚かして自ら大いなる者と称えたり。10小より大に至る凡ての人つつしみて之に聴き『この人は、いわゆる神の大能なり』という。11かく謹みて聴けるは、久しき間その魔術に驚かされし故なり。12然るにピリポが、神の国とイエス・キリストの御名とに就きて宣伝うるを人々信じたれば、男女ともにバプテスマを受く。13シモンも亦みずから信じ、バプテスマを受けて、常にピリポと偕に居り、その行う徴と、大いなる能力とを見て驚けり。

14エルサレムに居る使徒たちは、サマリヤ人、神の御言を受けたりと聞きて、ペテロとヨハネとを遣したれば、15彼ら下りて人々の聖霊を受けんことを祈れり。16これ主イエスの名によりてバプテスマを受けしのみにて、聖霊いまだ其の一人にだに降らざりしなり。17ここに二人のもの彼らの上に手を按きたれば、みな聖霊を受けたり。18使徒たちの按手によりて其の御霊を与えられしを見て、シモン金を持ち来りて言う、19『わが手を按くすべての人の聖霊を受くるように、此の権威を我にも与えよ』20ペテロ彼に言う『なんじの

銀は汝とともに亡ぶべし、なんじ金をもて神の賜物を得んと思えばなり。
21なんじは此の事に関係なく干与なし、なんじの心、神の前に正しからず。
22然ればこの悪を悔改めて主に祈れ、なんじが心の念あるいは赦されん。
23我なんじが苦き胆汁と不義の繋とに居るを見るなり』24シモン答えて言う『なんじらの言う所のこと一つも我に来らぬよう、汝ら我がために主に祈れ』
25かくて使徒たちは証をなし、主の御言を語りて後、サマリヤ人の多くの村に福音を宣伝えつつエルサレムに帰れり。
26然るに主の使ピリポに語りて言う『なんじ起ちて南に向かいエルサレムよりガザに下る道に往け。そこは荒野なり』27ピリポ起ちて往きたれば、視よ、エテオピヤの女王カンダケの権官にして、凡ての宝物を掌どる閹人エテオピヤ人あり、礼拝の為にエルサレムに上りしが、28帰る途すがら馬車に坐して預言者イザヤの書を読みいたり。29御霊ピリポに言い給う『ゆきて此の馬車に近寄れ』30ピリポ走り寄りて、その預言者イザヤの書を読むを聴きて言う『なんじ其の読むところを悟るか』31閹人いう『導く者なくば、いかで悟り得ん』而してピリポに、乗りて共に坐せんことを請う。32その読むところの聖書の文は是なり『彼は羊の屠場に就くが如く曳かれ、羔羊のその毛を剪る者のまえに黙すがごとく口を開かず。33卑しめられて審判を奪われたり、誰かその代の状を述べ得んや。その生命地上より取られたればなり』
34閹人こたえてピリポに言う『預言者は誰に就きて斯く云えるぞ、己に就きてか、人に就きてか、請う示せ』35ピリポ口を開き、この聖句を始としてイエスの福音を宣伝う。36途を進むる程に水ある所に来りたれば、閹人いう『視よ、水あり、我がバプテスマを受くるに何の障りかある』37（なし）38乃ち命じて馬車を止め、ピリポと閹人と二人ともに水に下りて、ピリポ閹人にバプテスマを授く。39彼ら水より上りしとき、主の霊ピリポを取去りたれば、閹人ふたたび彼を見ざりしが、喜びつつ其の途に進み往けり。40かくてピリポはアゾトに現れ、町々を経て福音を宣べ伝えつつカイザリヤに到れり。

●無の境地

使徒行伝の第8章です。

1サウロは彼の殺さるるを可しとせり。

だから、サウロは正にアンチ・クリストなんだ。この素晴らしい殉道の死を遂げている様を見てもなお可しとしたと。その瞬間では、パウロは何か撃たれてはいるんだけれども、逆な感じを持っているわけです。まぁとにかく、非常に自信の強い奴です。

どういう仕事をしても、究極は「無」の境地です。これは正に宗教的な境地で、極みです。

求めが烈しいほど、その人が本当にその求めに絶すると、凄いことになる。どのみちいい加減はダメですけれども。烈しい求めそのものが、何かをするんじゃない。それに絶するんです。パウロがひっくり返されるのも、それなんですね。

「求めよ、さらば与えられん」

というけれども、キリストのこの単純な言葉は、

「お前の求めなんてものは大したことはない。こっちが与えようとしているものがもの凄いんだ。その求めに絶しろ。」

と、それが本当の「求めよ、さらば与えられん」のキリストの気持なんです。もの凄く走ってぶっ倒れる。とにかく、ぶっ倒れるとか、降参するとか、そういう境地が本当の世界に入る関門なんです。求めるのも、全身で求めてぶっ倒れる。体当たりだからね、ノックじゃないんだから。体当たりしてぶっ倒れると、戸が開かれて今度は立ち上がれる、とこういうわけです。これはもう何事にも真理です。

抜かない日本刀。そうすると相手を負かしたと思ったら、実は相手を救っているんです。活人剣なんです。人を活かす剣だ。

これは有名な本当の話ですが、茶道の名人が、殿様に従って江戸にやってきて、不忍の池のそばで剣道の相当うまい奴に果たし合いを申し込まれた。

「私は、ちょっと待ってください」

と言って、近所の指南番に行って聞いた。そうしたら、その指南番は、

「貴方は何していらっしゃるのか」

「私は茶の道をやっている」

「そうですか、それでは、貴方は茶道の極意の境地に自分自身が入って、そして、上段に構えてごらんなさい。相手がもし打ってきたならば、貴方も打ちおろしなさい。それは同士打ちになる」

と。しかし、同士打ちでは本当はなかったですね。本当の境地で、剣道を何も知らないがしかし茶道の名人が、大上段に構えたら、その構えはもう剣道の極意の構えです。相手は参ってしまった。

「参りました。お見それしました。弟子入りしたい」

「いや、私は剣道ではない。お茶の道だ」

と。それで、お茶の道の弟子いりをした。相手を活かしてしまったですね、本当に。これが活人剣で、斬らないで、相手を負かすことが実は相手を救うことで、いわゆる勝ち負けじゃない。いわゆる相対的な勝ち負けとは違う。これが本当の世界。

学問もそうです。絶学すると本当の学問になる。アインシュタインとかエジソンなんてのは、それで発明が出てくる。技術に絶すると、今度は神技（かみわざ）の世界にはいる。神の技の世界だ。ダンテの詩でもゲーテの詩でも、かなりそういう境地です。だから、凄いんです。

「ダンテやゲーテは高嶺の花だ」

と、私はあの詩に書きましたね。けれども、私はダンテやゲーテと比較しようとは思わない、あの大詩人と。けれども、私の書く詩も質からいうと、この「神技」の境地の詩でなければ、書こうとは思わない。こういうことでやってます。

こういうのは本当にあなた方、楽しいでしょ、なるほどと。鍼だってそうだ。技を練ることも大事だけれども、もうひとつ奥の世界に入ると、自然に心配なくできるようになる。この福音を受けとったら、歌の世界もそうだ。何でもそうだ。そこへ行かなかったらつまらないよな。

●聖霊の力の徴

それで、今日は、ステパノと同じく選びの器であるピリポのことになる。ステパノとピリポ、この二人。

その日エルサレムに在る教会に対いて大いなる迫害おこり、使徒たちの他は皆ユダヤ及びサマリヤの地方に散らさる。

ステパノみたいなとんでもない野郎が出てきた、というので迫害が起こった。ユダヤ人というのは今でもそうだね。パレスチナ問題でもやんわりと折れて来るかと思えば、なかなか主張して譲らない。

散らされていった。けれども、彼らは散らされても、そこで一対一の伝道をした無名の人たちがいるわけです。

2 **敬虔なる人々ステパノを葬り、彼のために大いに胸打てり。**

「敬虔なる人々」というのは、迫害されてもなおエルサレムに留まっていたご連中です。

3 **サウロは教会をあらし、家々に入り男女を引出して獄に付せり。**

強引なことをやったね、更にサウロは。

4 **ここに散らされたる者ども歴巡りて御言を宣べしが、5 ピリポはサマリヤの町に下りてキリストの事を伝う。**

その中の最も選びの器が、このピリポです。ギリシヤ語では「ピリポス」と、エスがついている。使徒行伝の6章に、

「3 **然れば兄弟よ、汝らの中より御霊と智慧とにて満ちたる令聞ある者七人を見出せ、それに此の事を掌どらせん。4 我らは専ら祈りをなすことと御言に事うることとを務めん』5 集まれる凡ての者この言を善しとし、信仰と聖霊とに満ちたるステパノ及びピリポ、プロコロ、ニカノル、テモン、バルメナ、またアンテオケの改宗者ニコラオを選びて、」（使徒6・3～5）**

と、一番先に二人出ているでしょ、このピリポですね。とにかく、聖霊の器です。

6 **群衆ピリポの行う徴を見聞して、心を一つにし、謹みて其の語る事どもを**

聴けり。

「徴」のことは時々言いましたけれども、はっきり云うと、福音は徴の宗教だよな。だけれども、徴を、ただ徴として求めると、躓く。キリスト自身が神さまの大きな徴だから。ドイツ語の「ツァイヘン」(Zeichen)、ギリシヤ語で「セイメイオン」という。ゲーテの有名な、

„Alles Vergängliche
Ist nur ein Gleichnis."

「あらゆる過ぎゆくものは
徴（象徴、映像）過ぎない。」

という、

「グライヒニス」

という、あれがやっぱり「徴」です。「徴に過ぎない」と訳すと、ちょっと弱いんだ、あの「すぎない」という訳し方は。

「徴たるのみ」

です。何の徴かというと、「des Wesen」「本質の」。「Wesen」というドイツ語は「存在」（本質）という字です。

「本当の存在の、本質の徴である」

と。だから、

「天界においては地上のあらゆる徴が本当に成っている」

と。あの『ファウスト』の終わりの7、8行は本当に凄いね。

私たちはキリストの徴にならなければ。徴になるためには、自分が「無」にならないと、

「無者」

にならないと徴にならない。

「自分が消えていると、キリストがそこに現れる」

わけだからね。「消えている」と言ったってね、ありますよ、みんな。けれども、その相対的な存在の奥に、ダイヤモンドみたいに光るものがくる。それが徴なんだ。「グライヒ」というのは、「同じ」という意味だ。「グライヒニス」とは本質と「同じもの」だということ。

「徴が現れた」

という。これは、聖霊の力の徴ですよ。だから、徴を見て、その本質を捕まえなければいけないわけです。何の徴かと。

「これは聖霊の徴だ」

と。その聖霊を捕まえないと、聖霊を受けとらないと、自分も徴にならない。現象ばかりを追い求めたって、どうにもならない。だから、

「徴に躓く」

という。

●あけっぱなし

病が治った。治ったことをただ喜んだってしょうがない。

「何がこの病を治したか。その病を治したキリストの力の中にあれ」

と。だから、

「エン・クリスト」

という、「キリストの中に」存在していなければね。

毎日ごはんをいただくように、いつもキリストを食べてないと。食べさせられるんだ。

「食べなければなりません」

ではない。一体、「なりません」という言葉はいけないんですよ、あれ。「なりません」という言葉は律法的な言葉です。こうしなければ「いけません」だとかね。

「そうしてやるよ、必ずそうなるよ」

と。みんな、上からの言葉、上からの力です。

「ああそうですか、ありがとうございます」

と、ただあけっぱなしで受けとればいい。

本当の求めの姿はあけっぱなしなんだ。何も求めないような姿、それが本当の求めの姿です、逆説的に言うとね。ところが、その無の、無私の境地がなかなかつかめないので、一生懸命で今度は修養するわけだ。けれども、その修養が要らないというのが十字架なんです。

「私がそれをみんな引き受けて、お前が一生懸命でやろうとするものは全部、私は引き受けて、空っぽにしてやった。我執は全部抜けたぞ」

「ああそうです。本当に我執が抜けていました」

と。その十字架を受けとることだけは、真剣にと言ってはおかしいけれども、本式にやらないとね、これぱっかりは。本式に受けとるというのは本当にそこにぶっつぶれるわけです。

「参りました！」

と――何かの言葉で言いようがないです――そこはもう、自分でもって体験するよりかしょうがないね。ジーッと、朝早くでも、夜遅くでも、とにかく静けき時に受けとる。そうしたら、もうとにかく凄いことになる。力が来てしょうがないよ、光が臨んで。もう私は説明するのが嫌になってしまうんだ、異言になりそうになるから。

7これ多くの人より、之に憑きたる穢れし霊、大声に叫びて出で、また中風の者と跛者と多く医されたるに因る。8この故にその町に大いなる歓喜おこれり。

福音書にもよく出ているね、大声で叫んでどうしたこうしたと。悪霊が叫んで出て行ってしまう。悪霊が豚の中に入って、豚がみんな崖から落ちて溺れてしまった。

「キリストはひどいことをするなぁ」

なんて、豚の持ち主が怒ったかもしれない。仕方がない。

「中風の者と跛者と多く医された」

と、みんなそれぞれ何か原因があったんだな。その原因のやつがみんな追い出されてしまった。本当にピリポはキリストの御霊の力でもって現象、徴を起こした。それは本ものがあるから、起きた。そしたら、癒された者は、ただ癒された事を喜ばないで、このピリポの持っている世界、そこに飛び込んでこなければな。でなければ、本当の救いにはならない。

キリストは、

「力を受けなさい」

と。祈り入って、キリストの中に自分を、

「我れ汝のうちに在り」

という、その世界に祈り入って、もう何か知らんけれども力がきますよ。そしたら、原因なんかどうでもいい。そんな病気なんかすっ飛ばしてしまうから。とにかく、死人をも甦らせるようなキリストですから。二千年前のはなしではない。現在のはなし。だから、ピリポはこのキリストの力で、跛者も中風もみんな病気なんかすっ飛ばしてしまった。

●シモニズム

9ここにシモンという人あり、前にその町にて魔術を行い、サマリヤ人を驚かして自ら大いなる者と称えたり。

「自ら大いなる者と称えた」と。これはもうサタンの角度です。自分を大いなる者となんて思ったら、とんでもない。自分が非常に霊的になって、霊的な力を誇り出すと、これはもう、サタン的になる。キリストを抜きにして、霊的に強くなったなんて思ったらダメだ。霊的傲慢は最大の罪です。ところが、このシモンという奴はそうなんだ。

10小より大に至る凡ての人つつしみて之に聴き『この人は、いわゆる神の大能なり』という。11かく謹みて聴けるは、久しき間その魔術に驚かされし故なり。12然るにピリポが、神の国とイエス・キリストの御名とに就きて宣伝うるを人々信じたれば、男女ともにバプテスマを受く。13シモンも亦みずから信じ、バプテスマを受けて、常にピリポと偕に居り、その行う徴と、大いなる能力とを見て驚けり。

「御名とにつきて」ではない、「御名に在って」だ。自分も「大いなる能力」と思ったが、ちょっとこれは桁がちがう、それで、一応信じて受けとった。ところが、それはまだマネしているだけのはなしで、本当は受けとってない。あるがままに書いてある。

14エルサレムに居る使徒たちは、サマリヤ人、神の御言を受けたりと聞きて、ペテロとヨハネとを遣したれば、15彼ら下りて人々の聖霊を受けんことを祈れり。16これ主イエスの名によりてバプテスマを受けしのみにて、聖霊いまだ其の一人にだに降らざりしなり。

サマリヤ人がピリポの伝道によって変わってきたことを聞いて、それで、使徒たちが出掛けて行った。

「聖霊いまだ其の一人にだに降らざりしなり」

と、おかしなことが書いてある。ピリポに救われたけれども、ピリポはまだ本当に聖霊を与えることをしていなかった、というわけですね。まぁそういう事なんだ。「バプテスマを受けし」とは、これは水のバプテスマだろう。ちょっとおかしいね、これ。ピリポができないわけはないんだ。何も、ペテロやなんかと変わりはないんだから。

17 **ここに二人のもの彼らの上に手を按きたれば、みな聖霊を受けたり。**

「二人の者」とはペテロとヨハネです。そしたらば、按手でもって聖霊を受けたと。按手の事をやらなかったんだ、ピリポはね。

18 **使徒たちの按手によりて其の御霊を与えられしを見て、シモン金を持ち来りて言う、**19 **『わが手を按くすべての人の聖霊を受くるように、此の権威を我にも与えよ』**

「私もまたあなた方と同じように按手でもって聖霊を受けさせるように、金をだすから私にしてくれ」

と。「シモン金を持ちきたり」というのが大間違い。冗談じゃないぞというわけで、このペテロが、

20 **ペテロ彼に言う『なんじの銀は汝とともに亡ぶべし、なんじ金をもて神の賜物を得んと思えばなり。**

そういう、金でもって宗教的なものを得ようとする、御利益の中には時々そういうのが有るけれどもね。後から感謝して持ってくるのと違うんだ、これは。だから、これを

「シモニズム」

という。そういう間違った在り方を「シモニズム」という言葉ができているんです。財産のどれだけを献金すればどうなる、というような言い方の一般の俗な宗教はみなシモニズムと同じ様なものだ。たくさんの宗教が大きな殿堂を造ったりして栄えているのは、一種のシモニズムです。そういう金の関わりを持ったものは滅びてしまうぞと。

21 **なんじは此の事に関係なく干与なし、なんじの心、神の前に正しからず。**
22 **然ればこの悪を悔改めて主に祈れ、なんじが心の念あるいは赦されん。**
23 **我なんじが苦き胆汁と不義の繋とに居るを見るなり』**

本当に平伏すならば、

「なんじが心の念あるいは赦されん」

と。ペテロにやっつけられた。「苦き胆汁と不義の繋」と、おもしろいことが書いてある。金によるものは「不義の繋」だからね。

24 **シモン答えて言う『なんじらの言う所のこと一つも我に来らぬよう、汝ら**

我がために主に祈れ』

勝手なことを言っている。もう、シモンはこれでダメですよ。

●ピリポと閹人

25かくて使徒たちは証をなし、主の御言を語りて後、サマリヤ人の多くの村に福音を宣伝えつつエルサレムに帰れり。

26然るに主の使ピリポに語りて言う『なんじ起ちて南に向かいエルサレムよりガザに下る道に往け。そこは荒野なり』

ずっとエジプトの方に、南南西に向かって行く。ちゃんとそういうお告げがあるわけですね。

27ピリポ起ちて往きたれば、視よ、エテオピヤの女王カンダケの権官にして、凡ての宝物を掌どる閹人エテオピヤ人あり、礼拝の為にエルサレムに上りしが、

「閹人」というのは、おそらくこの言葉は字引にあまり出ていないでしょう。中国では「宦官」という、宮廷の奥にいる去勢された男です。

28帰る途すがら馬車に坐して預言者イザヤの書を読みいたり。29御霊ピリポに言い給う『ゆきて此の馬車に近寄れ』30ピリポ走り寄りて、その預言者イザヤの書を読むを聴きて言う『なんじ其の読むところを悟るか』31閹人いう『導く者なくば、いかで悟り得ん』而してピリポに、乗りて共に坐せんことを請う。

32その読むところの聖書の文は是なり『彼は羊の屠場に就くが如く曳かれ、羔羊のその毛を剪る者のまえに默すがごとく口を開かず。33卑しめられて審判を奪われたり、誰かその代の状を述べ得んや。その生命地上より取られたればなり』

34閹人こたえてピリポに言う『預言者は誰に就きて斯く云えるぞ、己に就きてか、人に就きてか、請う示せ』35ピリポ口を開き、この聖句を始としてイエスの福音を宣伝う。

これは、キリストが十字架に懸かって贖罪をしたということ。

36途を進むる程に水ある所に来りたれば、閹人いう『視よ、水あり、我がバプテスマを受くるに何の障りかある』37（なし）38乃ち命じて馬車を止め、ピリポと閹人と二人ともに水に下りて、ピリポ閹人にバプテスマを授く。

39彼ら水より上りしとき、主の霊ピリポを取去りたれば、閹人ふたたび彼を見ざりしが、喜びつつ其の途に進み往けり。40かくてピリポはアゾトに現れ、町々を経て福音を宣伝えつつカイザリヤに到れり。

「主の霊、ピリポを取り去りたれば、閹人ふたたび彼を見ざりき」

と、おそろしいことが書いてある。まぁ、大変な人です、ピリポは。エリヤみたいだね、

居なくなってしまった。「アゾト」は「アシトド」とも言う。ガザの少し北の方に当たる所です。カイザリヤという名前は、二つあるんですけれども、これはギリシヤの方ではなくて、イスラエルの西海岸にあるカイザリヤです。非常にドラマチックな、目で見るようですね。絵描きなら、ちょっと描きたいところだな、これは。

●前使徒たち

「主の霊、ピリポを取り去りたれば、閹人ふたたび彼を見ざりき」

という、簡単に書いてあるけれども、大変な内容ですよ、これは。もう参ってしまうね、こういうところを読むと。どうにもならない。これが、パウロが迫害していたところの、キリストの使徒たちのすがたです。ピリポというキリストの現象体が見えなくなってしまった。そして、また別の所に現れて伝道した。完全に、現実が飛躍しているからね。我々も祈りの世界でこのような飛躍をしないと。そういう真剣勝負を――真剣勝負というのもおかしいが――正に無刀流の世界だ。見えなくなってしまった。

とにかく、キリストの生命の、光の、力の、愛の現実というのは、こういう絶対次元の世界です。それが相対次元に展開しているのが、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書なんです。福音書なんてのは、全くその凄い現実を、キリストが展開しておられる。大変な方です。それがピリポに現れた。ステパノとピリポは本当に使徒たちの前の、前使徒たち、使徒以前の二人の使徒だ。そして、ステパノの殉道の死がやっぱり隠れた力になって、遂にパウロをひっくり返した。

だから、本当の歴史は天界に書かれている。人間が書いた歴史なんてのは大したことはないただ、聖書はその事をちゃんと御霊の世界から書いている。聖書が滅びっこないわけです、こういう現実でもって書かれているから。いわゆる思想ではないから。いわゆる相対的な歴史ではないから。相対界に絶対界が現象している世界ですから。

だから、友人たちのために現場に行って祈る時は、その境地でもって祈ってあげて、話して上げて、力を与える。ただ

「お大事に」

どころの騒ぎじゃない。それで、我々は本当にサタンに勝ち、悪い奴らからサタンを追い出してやる。伝道というのは、要するに、

「相手を助ける、救う」

ということだからね。言葉でただ伝えているんじゃない。力を伝える、生命を伝える。いわゆる御利益宗教とは違う。シモニズムと違う。そういうことで、この福音のために楽しく勇ましく行けるわけです。ざるを得ないです。

では、今日はそこまで。